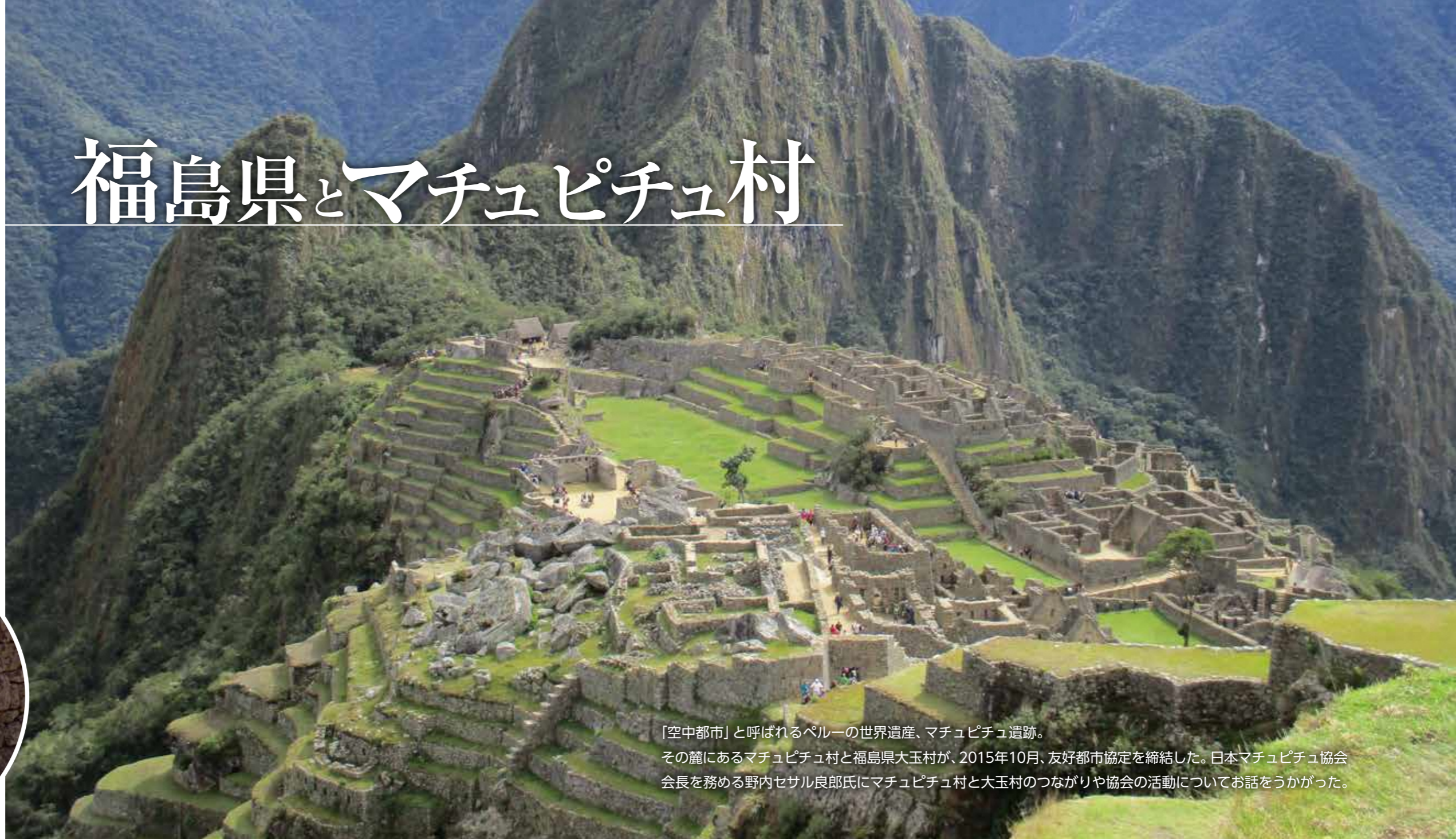
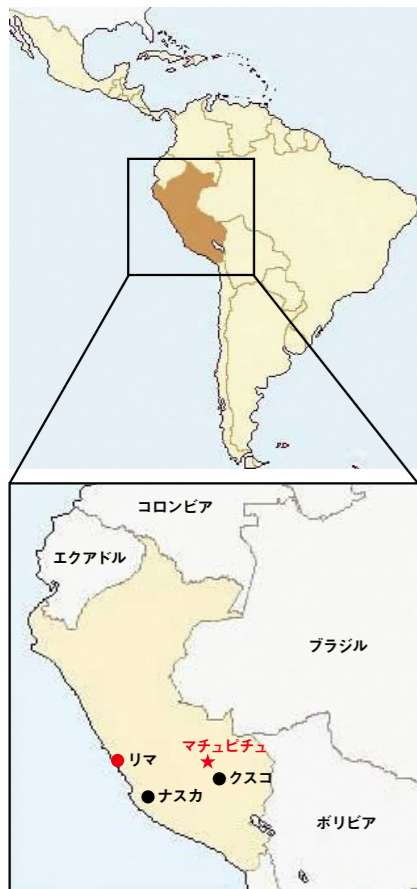


福島県とマチュピチュ村



「空中都市」と呼ばれるペルーの世界遺産、マチュピチュ遺跡。
その麓にあるマチュピチュ村と福島県大玉村が、2015年10月、友好都市協定を締結した。日本マチュピチュ協会会長を務める野内セサル良郎氏にマチュピチュ村と大玉村のつながりや協会の活動についてお話をうかがった。



友好都市協定を締結

2015年10月、福島県大玉村は、ペルーのマチュピチュ村と友好都市協定を締結した。

インカ帝国の遺跡があることで知られるマチュピチュ村。世界各地から「ぜひ友好都市に」との声が掛かっていったようだが、実際に協定を結んだのは大玉村が最初。マチュピチュ村の初代村長が、大玉村出身の野内与吉氏だったことがきっかけだ。

締結は数多くの人たちの尽力の賜だが、なかでも日本マチュピチュ協会の会長を務める野内セサル良郎氏の貢献は大きかった。

野内会長は野内与吉氏の直系の孫。2012年に大玉村の村長の親書をマチュピチュ村の村長に手

渡したあと、何度もマチュピチュ村に働きかけ、ようやく実現した。

日本とペルーの懸け橋に

現在、野内会長は名古屋市内在住。ペルーの魅力を伝えるために、東海地方の小中学校や高等学校、生涯センターなど、さまざまな場所で講演活動を行うとともに、南山大学大学院で与吉氏とマチュピチュとの関係や日本人移民の研究を続けている。また、活動のかたわら、マチュピチュ村を訪れ、文書資料の発掘調査も精力的に行っている。

日本マチュピチュ協会は2014年に設立された非営利団体。ペルー文化や日本人移民の歴史を紹介するなど、多面的な角度からアンデスを知ってもらう活動を展開する。ペルーの子ども達への学用品の支給支援などもあわせて行っている。

与吉氏は野内会長が生まれる6年前に他界しているのですが、2人は会ったことはない。しかし、会長は祖父の話を祖母から繰り返し聞くうちに、与吉氏の事績を



野内与吉氏

アンデス文明研究者となる天野芳太郎氏がマチュピチュ遺跡を訪問した際には、1週間ほどホテル・ノウチに滞在し、遺跡の案内を与吉がしたという。

村人の人望を集めた与吉は、1939年から、マチュピチュが正式に村となる1941年まで、最高責任者である行政官を務めた。第二次世界大戦で、ペルーは連合国側として参戦。1941年に太平洋戦争が始まると、ペルー政府は日本語新聞の発行を禁止、日系人の資産凍結措置などとも

に、不法入国を理由に日本人や日系人を逮捕するようになった。最終的に、アメリカ政府は中南米諸国に住む約2000人の日本人と日系人をアメリカ国内の収容所に強制連行した。

与吉のもとへも憲兵が派遣されたが、村人は自分たちの危険も顧みず「日本人はいない」と与吉の身を守った。

1947年、村の川が氾濫し、大きな土砂災害に見舞われた。率先して復興活動を行った与吉は、1948年、政府からマチュピ

マチュピチュ村を創った日本人 野内与吉資料館

野内会長は、与吉氏がペルーに渡り100年となる2017年、福島県大玉村に「マチュピチュ村を創った日本人 野内与吉資料館」を開設した。単身ペルーに渡り、村を作り上げた与吉の歴史を残すとともに、外国に渡って現地で功績を立てた日本人たちの軌跡を語り継いでいきたい。そして、今も異国の地でがんばる人々を勇気づけるきっかけにしたいという野内会長の思いが込められている。

資料館の展示品

- ・野内与吉遺品(約20点):マチュピチュ鉄道関連の工具、愛用品等
- ・写真パネル(野内与吉の歴史紹介、ペルー国紹介、マチュピチュ村紹介、大玉村紹介、マチュピチュ遺跡紹介、マチュピチュ村と大玉村友好都市締結の経緯、天野芳太郎氏の紹介、資料館開設までの歴史)
- ・古代アンデス文明展示:土器
- ・現代アンデス文明展示:民族楽器、民族衣装

「野内与吉資料館」は、現在、大玉村の公共施設である大玉村農村環境改善センター視聴覚室内に移転している。入場料無料。休館日は土日祝日。その他休館となる日もあるため、来館の前に問い合わせが必要。【TEL】0243-24-1939
詳しくはホームページを。
<https://oscar-nouchi-yokichi.wixsite.com/memorial-museum>



鉄道関連の工具



日本マチュピチュ協会 会長
野内セサル良郎 氏

- 1975年 ペルー共和国クスコ市に生まれる (日系ペルー三世)
- 1991年 就労のため来日
- 2005年 四日市大学卒業
- 2013年 マチュピチュ区役所日本特別代表者 任命
- 2014年 非営利団体日本マチュピチュ協会 設立
- 2017年 アンデス民族名誉人物賞 受賞
一般社団法人 野内与吉資料館 代表理事

を厭わず、村に尽くした与吉は、現地の人たちに大変喜ばれた。

1935年、「ホテル・ノウチ」を開業。当時は高価であった木材を使った村初の本格的木造建築で、3階建て21部屋を持つ立派なホテルだった。1階を郵便局や交番に、2階を村長室や裁判所に無償で提供、村は与吉のホテルを中心に発展していった。

与吉は、英語、スペイン語のほか、アンデス原住民の言語であるケチュア語に通じていたので、現地のガイドもしていた。後に、

後世に語り継ぐべきだと思うようになった。世界の人々にマチュピチュを知ってもらいたい、そう願っていた与吉氏。野内会長はその思いを受け継ぎ、日本とペルーの懸け橋になろうと、日本マチュピチュ協会を立ち上げた。

夢を叶えるため、1917年(大正6年)1月23日、21歳の時に移民船「紀洋丸」に乗り、横浜港から出国。契約移民としてペルーへ渡った。

他の多くの日本人移民とともに、現地の農園で働いていたが、契約内容と実地状況の違いや賃金の不払いなどから、農園での仕事を辞め、米国やブラジル、ボリビアなどを放浪。1923年頃に再びペルーへ戻り、ペルー国鉄のクスコサンタ・アナ鉄道に勤務し、

会社専用電車の運転や路線拡大工事に携わった。

その後、路線拡大工事の最終地点であったマキナチャヨ(現・マチュピチュ)で生活を始めた。マキナチャヨは、電気も水道もない、数家族だけが住む未開の地だった。与吉は、川から水を引いて畑を作ったり、水力発電を導入して電気を引いたりもした。あまりにもいろいろなものを作ってしまっただけで、「七つの職を持つ男」と呼ばれていた。創意工夫に富み、労



マチュピチュ遺跡



インティワタナ



太陽の神殿



マチュピチュは、南米ペルー共和国のアンデス山脈、標高約2,430メートルの尾根に位置する古代インカ帝国の遺跡。山裾から遺跡の存在が確認できないことから、「空中都市」「インカの失われた都市」などと称される。1983年、マチュピチュ遺跡とその周辺が「マチュピチュの歴史保護区」として世界遺産に登録された。

遺跡は神殿と居住区で構成され、総面積の約半分の斜面には

40段に渡る段々畑が広がっている。建造物の石積みは、カミソリの刃すら隙間に通さないほど精密に組み立てられており、数百年経った今でもしっかりと姿かたちを遺している。なぜ、このような高地の断崖絶壁に都市を作ったのかは諸説あるが、アンデス文明においてインカの人々は文字を持たなかったために記録がなく、いまだ謎に包まれている。

遺跡には、太陽の神殿、コンド

ルの神殿などがあるほか、インティワタナ（地球と太陽を結ぶ岩）という聖なる場所もある。1911年にアメリカの探検家 ハイラム・ビンガムが発見した時、そこには先住民が住んでいた。現地の人たちは、遺跡の存在を知っていたが、この場所を守るため隠していた。

現在、遺跡の麓にある人口7,000人ほどのマチュピチュ村には、世界中から一日に3,000～5,000人の観光客が訪れている。

チュウ村の村長に任命された。1950年頃、再びペルー国鉄で働くため、クスコ市へ移住。定年まで勤めると、仕事を息子のノウチ・セサル・モラレス（野内会長の父）へ引き継いだ。晩年、与吉は、一度日本へ帰国している。1958年に、ペルーを訪れ、マチュピチュ遺跡を見学された三笠宮殿下に、与吉の長女が花束を贈呈。その出来事が日本の新聞記事になった。記事を目にした与吉の日本の家族が与吉の消息を知り、日本大使館を通じて



©日本マチュピチュ協会

開発が始まった頃のマチュピチュ村

連絡をとったことで、1968年、52年ぶりに大玉村へ帰郷した。日本に滞在中は、マチュピチュ遺跡に関する講演会を開催しペルーの魅力を伝え、地元新聞やラジオ番組に出演した際には、「今世浦島（現代の浦島太郎）」と紹介されたりもした。日本に帰るように家族は説得したが、ペルーに妻や11人の子もたちが待っているからと、ペルーに戻った。そのわずか1年後、与吉は息を引き取った。享年74。



©日本マチュピチュ協会

現在のマチュピチュ村



友好都市協定締結

- ・野内会長と行くマチュピチュツアー（2019年4月出発）発売中！！
- ・講演依頼などは日本マチュピチュ協会ホームページ参照。（<http://japanmachupicchu.wixsite.com/peru>）